

● 小 学 校 編 ●

運動エネルギー概念の確かな基礎づくりのための教材・教具の開発
～第3学年「風やゴムの働き」の改善の方策～市原市教育センター指導主事 もりやま しゅうじ
森山 秀治

1 研究主題について

3年生は理科を学び始める学年であり、本単元は小学校学習指導要領解説理科編における内容区分「A 物質・エネルギー」の「エネルギーの見方」に位置付けられる。力学的エネルギーについて初めて科学的に触れるため、エネルギー概念を捉えるための基礎作りについて丁寧な指導が必要である。

本研究では主として運動エネルギーに注目した。本単元で物体が運動する様子についてのイメージを持たせたり、運動エネルギーの大小によって生じる現象の違いについて定性的な理解をさせたりと、運動エネルギー概念についての基礎を育むことが重要であると考えた。

本単元は運動エネルギーとして風の働きが扱われている。風の働きによって車を動かし、力の大小による動く様子を比較しながら、風が物を動かすことができることを捉えるようにするものである。ここでは、児童に風の力の強弱による仕事量を定性的に比較することを通して、「ぶつかることによって仕事をする」「力の大きさにより現象が変わる」というエネルギーの見方について、運動エネルギー概念の基礎を育むことが重要である。

本研究では風の働きを運動エネルギーに着目して捉え直し、「エネルギーの見方」について後述の3つの視点から教材を開発し、運動エネルギー概念の基礎づくりを目指した。

2 研究目標

大型化・可視化などの工夫をした教材・教具を開発、指導計画に位置付けることで、

運動エネルギー概念の基礎を育むことができることを、実践を通して明らかにする。

3 研究の実際

(1)運動エネルギー概念の基礎

本単元において運動エネルギー概念の基礎を育むには、「風」の本体が「空気」であることに気付かせ、「空気が勢いよくぶつかって物を動かしていること」のイメージを具体的に持たせることが重要である。また、エネルギーのなし得る仕事の大きさについて、従来の「車が進んだ距離の比較」だけではなく、「動かせる車の重さの比較」を行うことも運動エネルギー概念の基礎を育む一助となると考えた。以上のことから、本研究では風の働きにおける運動エネルギー概念の基礎を次のように定義した。

- 風は空気の動きであり、空気はぶつかることによって物を動かすことができること
- 風の強さを変えて比較すると、物の動く距離や動かせる物の重さに違いが出ること

(2)教材・教具の開発・工夫

前述の運動エネルギー概念の基礎から、以下のような教材化の視点で教材・教具の開発・工夫を行った。

- ①「風」の本体が空気であることに気付かせ、「空気がぶつかって物を動かしていること」のイメージを持たせる。
- ②勢いよく大量に空気を当てると遠くに物を動かしたり、重い物を動かしたりすることができることを理解させる。
- ③エネルギーの大きさを体験しやすく、比較しやすくする。

(3)授業の実際

①第1時

はじめに表-No.1のように大型帆かけ車が動いている様子を送風している部分が見えないように撮影した動画を提示し、興味関心が高められるようにした。児童はなぜ動くのかという疑問を持ち、帆のはためきから風が影響を与えていることに気付いた。次に自分たちの帆かけ車にうちわで風を送り、車が動くことを確認した。児童は扇ぎ方による動きの違いに気付いた。また、表-No.2毛足の長いラグと空気砲を用いることで、空気がぶつかっていることを視覚で捉えることができた。最後に大型帆かけ車に全員で風を当てた。一人の風では動かなかった車も、複数で風を当てれば動くことから、重い物でも大量の空気を勢いよくぶつけることで動かせることを体験できた。

②第4時

第2・3時では強い風と弱い風の働きの違いについて学習した。大型帆かけ車に重りを含め、これまで動いていた風の力では動かないことを受け、風で重い車を動かすにはどうすればよいかという問題に取り組んだ。自分たちの帆かけ車に重りを含めて実験を行い、弱い風では動かなかった車が強い風で動くことから、強い風と弱い風の重い物に対する働きの違いに気付くことができた。また、直近の台風による被害のニュース映像や強風で車が吹き飛ばされる様子、風力発電など身近な風のもつエネルギーについて動画で紹介した。自然の強い風の働きがもたらす脅威や、そのエネルギーの利用の仕方について知り、自然のエネルギーの大きさや変換について考えることができた。

③第7・8時

第5・6時にゴムの元に戻ろうとする働きについて学習した後、まとめとして、表-No.3のような風やゴムの働きを説明させるためのものづくりを行った。見本からそれぞれの動く原理について考え、自分が作

表 授業で使用した教材・教具

<p>No.1 大型帆かけ車</p> 	<p>1～6時間目で使用</p> <p>教材化の視点①②③</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 風で物が動くことを実感できる。重い物を乗せることでさらに強い風の働きが必要なことも実感できる。 ○ アルミを素材とした材料を中心として作ることで軽量化を図った。また、帆の部分を取り外し、折りたたむことで持ち運びを容易にした。 ○ ゴムの働きの学習では帆を外し、荷台用ゴムをかけ、同様に活用した。
<p>No.2 ラグと空気砲</p> 	<p>1時間目で使用</p> <p>教材化の視点①</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 空気砲から空気を打ち出し、毛足の長いラグにあてることで毛が倒れ、跡が付く。空気がぶつかっていることを視覚で確認できる。 ○ 送風機では実感できない「空気がぶつかる」という現象について体感させ、風も同様の現象であるということに気付くことができる。
<p>No.3 風やゴムの働きを説明させるためのものづくり</p>	<p>7・8時間目で使用</p>
<p>A 空気砲射的</p>  <p>B 回転式巻き上げ機</p>  <p>C 簡易ホバークラフト</p>  <p>D ゴム式回転玩具</p> 	<p>教材化の視点①②</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 風やゴムの働きを用いたものづくりを通して説明書を作る活動を行った。空気がぶつかることやゴムが元に戻ろうとすることが分かりやすいものを目指した。ものづくりに終わることなく、説明書を書くことで児童は現象について振り返りながら、理解をさらに深めることができた。教師も児童の個々の理解を把握でき、指導改善に役立てることができた。 <p>A 空気砲射的 ゴムの元に戻ろうとする働きで空気を押し出し、その押し出された空気がぶつかることでの的を吹き飛ばす。</p> <p>B 回転式巻き上げ機 空気がぶつかることでプロペラが回転し、軸につけた糸が巻きつき、糸の下部につけたカップを上げる。</p> <p>C 簡易ホバークラフト 発泡スチロール製の井容器にモーター・プロペラを取りつけたもの。プロペラで風を起し、床にぶつけることで井容器が少し浮き上がる。</p> <p>D ゴム式回転玩具 軸に巻きつけた糸を引くと、同じ軸につけたゴムが巻きつき、糸を緩めるとゴムが元に戻ろうとして軸が回転する。</p>

りたいものを選択し作成した。その後、作品について説明書を書いた。児童はおもちゃが動く仕組みについて風やゴムの働きと関連付けながら表現することができた。

(4)分析と考察

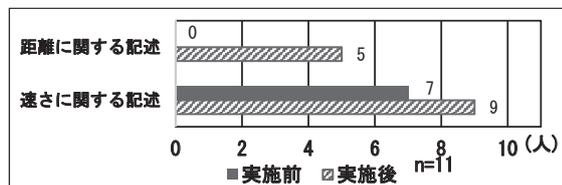
①実施前後での調査

研究についての調査を検証授業の実施前と実施後で行った。全て記述式で行い、実施前後における児童のもつ運動エネルギー概念について比較・分析した。(一部を抜粋)



資料1 なぜ風を当てた帆かけ車は動いたのか

車が動く理由について、衝突の表現を用いた児童は2名から9名に増えた。風で物が動く現象について空気がぶつかっているイメージを持たせることができたと考える。

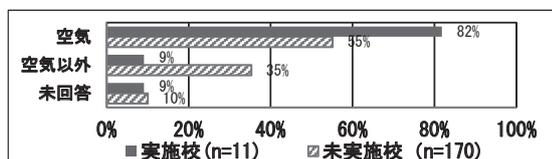


資料2 帆かけ車にさらに強い風をあてると(複数回答)

風の強さを変えたとき帆かけ車に生じる現象について、距離に関する記述が、0人から5名に増加した。速さに関する記述は実施前、実施後ともに距離に関する記述より多く見られた。運動している空気が仕事をした結果について、多様に捉えられるようになってきたと考える。

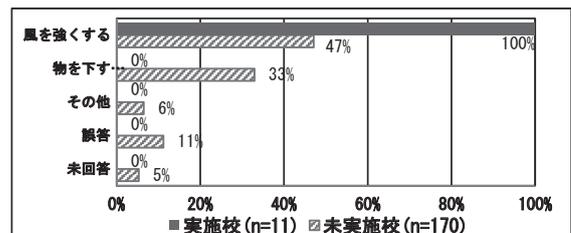
②実施校と未実施校での比較

研究授業を実施した11名と、他校で本単元を学習した研究授業を実施していない児童170名について調査を行った。全て記述式で行い、児童のもつ運動エネルギー概念について比較・分析した。(一部を抜粋)



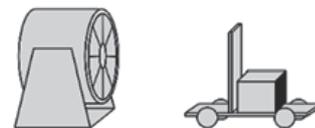
資料3 風の正体はどんなものだと思うか

風の本体について、実施校では82%の児童が風は空気からできていると回答した。この結果から表-No. 2ラグと空気砲や表-No. 3 A 空気砲射的を用いたことで、空気の衝突を体感し、風の本体が空気であると捉えられたと考える。



資料4 重りの乗った車を動かすには

資料4より、実施校では全員が風を強くすることで、下の図のように帆かけ車がより大きいエネルギーを得ることで車が前に進むことを理解していた。



4 研究のまとめ (成果・課題)

(1)成果

空気の衝突を可視化するための教材・教具を用いたことで、風の正体が空気の流れであり、ぶつかって物を動かしているという運動エネルギー概念の基礎を育むことができた。また、動かせる車の重さの比較により、なし得る仕事の大きさについて意識をもたせることができた。そして、大型化した教材・教具を用いたことにより、風のもつエネルギーや物の動く距離・動かせる物の重さに違いが出るということについて実感を伴って理解させることができた。

(2)課題

衝突をして仕事をするという共通性から、運動エネルギーの系統について、流れる水のはたらきの単元でも、運動エネルギー概念を育むための教材・教具を開発したい。

中学校編

ものづくり教育の特色を活かした、 生徒の主体性を育む協同学習の基礎的研究

～発注方式を取り入れたものづくり教育における指導法の改善を通して～

君津市教育委員会指導主事 おかもと 岡本 せいじ 誠士



1 研究主題について

現代社会はグローバル化や情報化といったように、急激に変化をしている。加えて、科学及び技術の進歩はめざましく、情報技術分野を中心とした技術革新の加速化は、生徒の生活や学びに大きな影響を与えている。このような社会を生きる生徒たちに、主体的に他者と関わりながら、多様な価値観を受け入れられる柔軟性と協調性の育成を図ることが必要である。そのためには、生徒たちが互いに話し合い、多様な視点で学び合う能動的な学習、すなわち「主体的・対話的で深い学び」が重要であり、新学習指導要領においても、生徒の学び方として示されている。

これまでのものづくり教育の実践で、既に協同学習は実施されている。しかし、実際の授業では、「道具を協力して使う」、「仲間の作業を手伝う」といった班活動になりがちで、仲間と協同して課題点を探求するなど、生徒の学びを深めたり広げたりするためには課題がある。

そこで本研究では、ものづくり教育の協同学習における指導法の改善に焦点を当てた。指導法の改善点として、ものづくり教育だからこそできる、課題提示の仕方と円滑なコミュニケーションが図れる学習ツールに着目した。これらの改善点の成果と課題について検証し、生徒が主体的・協同的に取り組めるものづくり教育の指導法について明らかにするために、本主題を設定した。

2 研究目標

ものづくり教育の特徴を活かした、課題提示の仕方と円滑なコミュニケーションが図れる学習ツールの成果と課題について検証し、生徒が主体的に学ぶことのできる協同学習の基礎について明らかにする。

3 研究の実際

(1)研究仮説

①課題提示の仕方として、「発注方式」を取り入れることで、生徒が課題を自らのものとして捉えながら学ぼうとする姿勢を育むことができるであろう。

②円滑なコミュニケーションが図れる学習ツールとして、ICT機器を活用することで、他者と協同しながら学習に取り組もうとする姿勢を育むことができるであろう。

(2)研究の具体的な内容

①ものづくり教育の特徴

今日のものづくり教育について、千葉大学教育学部の鈴木隆司先生は、「間違いや失敗は、犯してはならないことだと捉えるのではなく、そこは学びが始まる機会になると捉え直すことだと思います。そして、子どもたちが安心して失敗できる環境や試行錯誤できる学びを保証していく授業づくりを考える必要があると思います。」と述べている。

このように、ものづくり教育は、試行錯誤しながら課題を解決する場面があり、そこには仲間の異なった視点から検討する必要性が出てくる。そこに本来の協同学習の

必要性が見出され、他者と協同しながら学びを深めたり広げたりすることが可能である。

②「発注方式」について

本研究では、生徒が課題を自らのものとして捉えながら学ぶことができるよう、社会の中のものづくりを意識した沼田和也の実践を基に、「発注方式」という授業構想を立てた(図)。沼田の実践では、市場調査、構想、製作、コマーシャル制作、考察の5つのプロセスから授業が構成されている。さらに、社会におけるものづくりは、顧客から注文を受け、チームで試行錯誤しながら商品を作り上げていくプロセスがある。そのプロセスには、仲間の異なった視点から検討する場面が多くあり、生徒の学びの広がりや深まりにも期待できる。

- 生徒同士がひとつのチームとして活動できるよう、学習班ごとに製造業を起業する。
- 課題と条件を設定する。(商品の発注)
※発注は外部から行う。本研究は千葉大学教育学部教授鈴木隆司先生にご協力を頂いた。
- 学習班の活動(主な活動過程)
(調査→試作→評価→製作→CM制作→考察)

図 「発注方式」の授業構想

③実践題材の工夫

本研究では、生徒同士がチームで取り組めるよう、学習班で一つの物をつくる「ペーパーブリッジコンテスト」に着目した。さらに、生徒にとって、ペーパーブリッジコンテストの課題をより鮮明なものとするため、電車の模型である「Nゲージ」を活用し、「紙を使ってNゲージが通過できる吊り橋をつくらう」を課題とした。また、吊り橋とすることで、車両や軌条の重量、電車が走行する振動、吊るし方など、多様な視点での対話が期待できる。生徒は、Nゲージが通過する軌条を吊すための梁を紙で製作し、Nゲージが無事に通過できるかを競う(写真)。



写真 Nゲージを活用した題材の様子

④検証授業における仮説の分析方法

本研究では、協同学習における構想場面と製作場面に焦点を当て、以下の分析をする。

(ア)対話内容の分析

対話内容の分析では、課題の解決策を見出す中で行われる対話から、生徒の学びについて見取る。対話内容の分析では、対話を4つのカテゴリーに分け、内容を区別する(表1)。また、抽出方法については、カウンセリング場面に用いられる、非言語的コミュニケーションを含んだトランスクリプトを用いた。

表1 各カテゴリーとその定義

カテゴリー	定義
発話	学習班の活動が前進する内容
分岐	学習班の活動が正反対となる内容
その他	発話や分岐に当たらない内容
非言語	声として発せられない行為・行動

(イ)ワークシートの記述内容の分析

本研究では、ワークシートの中から二つの記述項目に関する内容を抜き出し、それぞれの変容を分析する(表2)。

表2 ワークシートの項目と見取る生徒の姿

ワークシートの項目	見取る生徒の姿
課題	課題の捉え方
対策	協同学習によって学んだ知識

(ウ)ICT機器の活用時間と対話内容の分析

本研究では、円滑なコミュニケーションは学習班の対話の出現量に関係があると考え、ICT機器の活用時間と学習班の対話内容の各カテゴリーの出現量について分析する。分析は、ICT機器の操作に慣れてきた段階で行う。

(3)分析結果

分析では各学級2班ずつ、計6班を無作為に抽出した。また、分析した6班が同様の傾向を示したため、一つの抽出班について示す。

①対話内容の分析結果(表3)

対話内容の各カテゴリーの出現量を分析したところ、個人差はあるものの、学習班の活動が前進する「発話」が多くなされていた。

表3 抽出班における対話内容の各カテゴリーの出現数(単位:回)

第3・4時				第5・6時			
生徒A	生徒B	生徒C	生徒D	生徒A	生徒B	生徒C	生徒D
発: 38	発: 9	発: 8	発: 21	発: 58	発: 16	発: 12	欠席
分: 6	分: 8	分: 5	分: 10	分: 2	分: 5	分: 7	
そ: 1	そ: 1	そ: 2	そ: 7	そ: 4	そ: 10	そ: 5	
非: 94	非: 129	非: 134	非: 97	非: 96	非: 124	非: 130	

(注)各カテゴリーの表記方法:「発」発話、「分」分岐、「そ」その他、「非」詳細なコメント

②ワークシートの記述内容の分析結果(表4)

記述内容は、第3・4時は既存の材料に頼る傾向が多く見られたが、第5・6時になると、課題の捉え方や構造に着目した記述へと変容した。

表4 抽出班におけるワークシートの記述内容

	生徒A	生徒B	生徒C	生徒D
3・4時	(課題) 紙がグニゅってなる。 (対策) 紙をたくさん鉄の棒で補強する。	(課題) 未記入 (対策) 未記入	(課題) 掃き置を減らす。 (対策) なるべくテープもつなげる。	(課題) 紙が丈夫でない。 (対策) 紙をたくさん使って強くなる。
5・6時	(課題) ①折れる。 ②広がる。	(課題) ①紙が弱い。 ②広がってしまう。	(課題) ①中心が折れる。 ②広がる。	欠席
	(対策) ①トラス構造にする。 三角形にする。 ②下に補強を入れる。	(対策) ①紙を三角形にする。 ②紙の棒を下につけ、広がるのを防ぐ。	(対策) ①三角形にする。 ②下に紙の棒を入れる。	欠席

③ ICT 機器の活用時間と対話内容の分析(表5)

二つの抽出班における、ICT 機器の活用時間と対話内容の各カテゴリーの出現量の関係性を分析したところ、学習班によって傾向が異なった。また、活用時間と対話内容の各カテゴリーの出現量に関係性は見られなかった。

表5 2つの抽出班における、ICT 機器の活用時間と対話内容の関係

	抽出班 A				抽出班 B			
	生徒 A	生徒 B	生徒 C	生徒 D	生徒 E	生徒 F	生徒 G	生徒 H
ICT 機器活用時間	31分	48分	65分		12分	41分	28分	
「発話」量	58回	16回	12回		32回	35回	43回	
「分岐」量	2回	5回	7回	欠席	8回	5回	11回	
「その他」量	4回	10回	5回		5回	4回	3回	
「非言語」量	96回	124回	130回		102回	110回	90回	

(4)考察

①「発注方式」と生徒の主体性について

対話内容の分析結果から、学習班の活動が前進する「発話」が多くなされ、第5・6時には、増加していることがわかった。ここに、ワークシートの記述内容を合わせると、生徒が課題を自らのものとして捉えた上で、協同学習によって最善な解決策を見出すことができていることがわかる。

② ICT 機器の活用と円滑なコミュニケーションについて

学習班の対話記録から、分析結果の諸要因について調べた結果、ICT 機器の活用時間と対話内容の関係は、学習班内の役割に関係があることがわかった。一方で、どの学習班にも共通して動画や写真を活用した方法が多く、試作品の状況を詳細に記録し、構想を再検討する際に活用されていた。つまり、学習班の話し合いを深める上で、ICT 機器の活用が有効であることがわかった。

4 研究のまとめ(成果・課題)

(1)成果

協同学習において、課題提示の仕方として、「発注方式」を取り入れたことで、生徒の主体的な学びにつながるということがわかった。また、ICT 機器の活用は、構想を再検討する際に、学習班の円滑なコミュニケーションにつながるということがわかった。

(2)課題

本研究は課題提示の仕方に焦点化しているため、生徒の主体性に関わる他の要因を特定し、その指導法について検討する必要がある。

【参考文献】

技術教育研究会編(2016)『小学校ものづくり10の魅力-ものづくりが子どもを変える-』一藝社
沼田和也(1999)『技術教育研究 No.54』

企業派遣

「鉄づくり」を支える「人づくり」

しんにつつまきん
～新日鐵住金における人材育成～

県立館山総合高等学校教頭 やぶさき ひでと
藪崎 秀人



1 はじめに

新日鐵住金株式会社は、「総合力世界 No.1」をスローガンとする鉄鋼会社である。その中核をなす君津製鐵所は、協力会社社員を含めると約 18,000 名の大所帯であり、地域を支える製鐵所でもある。安全第一を掲げながら社員全員の意識を高め、高品位の製品を世に送り出し続けるための「人づくり」とはいったいどのようなものなのか、企業研修を通して学んだことを教育現場に還元したいと考えている。

2 自主管理活動における人材育成

企業の生産を支える仕組みの一つに自主管理活動がある。自主管理活動とは各々の自主性に基づいて平等な立場でグループを編制し、職場の問題や課題を取り上げ、この解決に創造性を発揮し挑戦努力する継続的なグループ活動である。日本の製造現場では、職場の諸問題を自主的に解決する活動としてこの手法が盛んに行われている。世界の企業と比較して日本企業が高い品質と現場における安全性を確保ができて一つの重要な要因とされている。君津製鐵所ではこの活動を更に深化させ、AC&M と称して全社員が一体となって精力的に取り組んでいる。この取組の重要な点は、平等な立場で一人一人が自らの力で課題を見出し、解決策を考え、結果を出すところにある。さらに、その考えをグループで相談し熟成させ標準化させるという過程で、この活動は職場のモラル向上と企業体質の強化に大きく貢献している。

この取組はまさに教育現場における「自ら学び自ら考える力などの生きる力の育成」の理念が企業という場で高度に実践さ

れている証である。総合的な学習の時間だけでなく、従来以上に普通教科指導等の中にも課題探求・解決型の授業推進の必要性を痛感した。

3 安全最優先の取組と教育

新日鐵住金には三法六則三心得という社員が守るべき安全衛生理念がある。これは、労働安全衛生法が根拠となる具体的な作業について遵守すべき重要事項を挙げ、各部署において始業時の唱和や、目に付く所への掲示などにより周知徹底が図られ、絶対に事故を起こしてはならないという意識を協力会社に至る全ての職員に浸透させるための努力を日々続けている。工場の作業現場におけるルールがそのまま学校現場にはつながらないが、「守るべきルールは守る」という当たり前のことを不断の努力と声掛けなどで啓発していく姿勢は学校現場においても見習うべきところが多い。

また、災害を未然に防ぐ観点から危険予知（KY）の手法が工場では浸透している。学校現場においても、教諭がKYを身に付け実習等で活用し、更に生徒にこの手法を身に付けさせ、実践できるようにさせることが有効である。実験や実習に留まらず、登下校から始まる全ての行動に対して、危機管理上この手法は生かされるはずである。

4 おわりに

鉄は冷たく無機質であるが、「鉄づくり」は対話による熱き「人づくり」が基盤となっている。このことを企業研修で学ばせていただいた。企業での先進的な優れた取組を教育現場に取り入れ、社会を支える人材育成に寄与したいと考えている。

企業派遣



企業派遣研修を終えて

～千葉ロッテマリーンズからいただいた宝物～

浦安市立見明川小学校長 ^{すずき}鈴木 ^{かおり}香織



1 千葉ロッテマリーンズの企業理念

千葉ロッテマリーンズは、以下の三つを企業理念に掲げ、地元千葉県を中心に野球・地域振興、社会貢献活動に真摯に取り組んでいる企業である。

- (1)スポーツ文化への貢献・・・「野球」を通じスポーツ文化の振興に貢献する。
- (2)地域への貢献・・・夢と感動を提供し、活き活きとした地域社会の実現に貢献する。
- (3)社会への貢献・・・スポーツ文化と地域への貢献を通じ、より良き社会実現を目指す。

この企業理念は、学校経営に共通する部分がとても大きいと感じている。

もともとプロ野球観戦が大好きな私にとって、昨年度、千葉ロッテマリーンズで1年間研修できたことは、全てにおいて新鮮であり、たいへん有意義であった。

2 実際の研修内容

研修内容は次の(1)～(4)のとおりである。

- (1)企画及び運営の補助業務
 - ・小学生、中学生の招待事業
 - ・県内イースタンリーグ公式戦開催
- (2)県内学校訪問に係る支援業務
- (3)公式戦におけるファンサービスへの参加
- (4)教員研修（教職3年目研修・教職11年目研修）に係る支援業務

これらの業務において、社員の皆さんと同じように会議に参加し意見を述べ、一緒に仕事をさせていただく機会を得た。心と身体で「体験」することは、やはり「深い学び」につながると思う。

3 今、学校でしていること

「千葉ロッテマリーンズで何を研修したの？」と誰からも質問された。敢えて一言で言うならば、「企業理念を実現するための実際の取組」を学んだと答えたい。一年間が短く感じるほど、教員人生の中で宝物のような研修期間となった。違う世界を経験したことで、何より私が更に元気になったと思う。教職員や子どもたち、保護者や地域の方と元気を分かち合いたいと思っている。

また、研修先の職員の方々の寄せ書きのユニフォームを記念にいただき、校長室に飾っている。気分を変えたい子どもたちや、来客と校長室で話すとき、ユニフォームへの質問が話のきっかけとなっている。今後も、学校で生かせることは数多いと考える。例えば、次の(1)～(4)のような姿勢や思いで現在、取り組んでいる。

- (1)「おもてなしプロジェクト」を通して学んだ「感謝を表すこと」、「挨拶」を生かしている。「挨拶」は本校の重点目標としているため、始業式の話もそこから始めた。
- (2)「スピード感」を大切にしている。できることはすぐ改善に繋げる企業の姿勢を学んだ。学校も早い対応を社会から求められていると感じている。
- (3)県内学校訪問をしながら作らせていただいた授業資料を活用して、体力テストに生かしている。校長会でも紹介した。
- (4)「PDCAサイクルの具現化」を学校経営に生かしている。来期の更なる充実のために、今ではPDCAサイクルが当たり前だと感じるようになった。

企業派遣

百貨店での企業研修の経験

～「いつも、人から。」に込められた人の心を大切にする精神～

県立清水高等学校教頭 くさかり ひろなお
草刈 廣直



1 はじめに

社会の激しい変化の時代を迎え、学校も新しい時代にあった組織運営の必要性を感じ研修に臨んだ。研修先に百貨店を選択したのは時代の変化や顧客のニーズに素早く対応する組織経営を参考にしたいと考えたためである。

2 企業研修での経験

私の配属先は日用雑貨売場で、主に取り扱った商品は、タオル・バス・トイレタリー用品である。売場では、カウンターでの販売に加え、株主優待やクレジット会員、その他特典やキャンペーンに応じたサービス、店の売場案内等、販売員として様々な接客業務にあたった。

売場では、タオルを取り扱う関係で、御進物の承りが多く、どのようなものを贈れば良いのか迷われるお客様には、一緒に商品選びのお手伝いをする必要もあった。また、お包みの仕方などで、掛け紙（熨斗紙）の有無や表書き、水引の種類など、用向きに応じたアドバイスをする必要もあった。時には、お客様から、承りに応じられない御要望をされることもあり、そのような場合には、「決まりだからできません」ではなく、できないことを「理解」してもらえよう粘り強く説明する必要があった。

組織マネジメントについては、早番・遅番・非番など、シフト勤務のため、毎日の業務の引き継ぎや情報共有を図るための工夫がなされていた。販売施策の共通理解を図ることの難しさについて、売場のマネージャーから御教示を受けた。販売員には、正社員の他、商品の製造元から派遣されて

いる方など、雇用形態が様々であった。マネージャーによれば、無理に共通理解を図ろうとせず、自ら主体的に考え行動できるよう日頃から意識付けをすることが大切とのことだった。具体的には、会社の経営理念や「百貨店」はこうあるべきだという意識付けが良いサービスにつながるというものであった。研修中に私自身がマネージャーの言葉を裏付けるような体験をした。一つは、営業中に地震が発生した際、管理職の的確な行動を見て、何をしたら良いのか分からなかった私も正しい行動をとることができた。もう一つは、荒天時や交通機関の乱れで生徒の登下校や授業の心配など普段学校ではできていたことが、雨天時のお客様用手提げの雨対応に気付けないことがあった。販売員としての意識が欠けていたことが悔やまれた。人とは、立場によって意識が変わってしまうことがこの時良く分かった。

3 まとめ

この研修を通して分かったこととして、じっくり話を聞き相手の気持ちを理解しようとする大切さ。また、こちらの立場を理解してもらい協力を得ること。人を動かす、人をまとめるためには自らの日頃の行動が大切であること。立場が人を作ることなどであった。

研修を通じて貴重な経験をすることができた。研修先でお世話になった方々には、本当に感謝している。また、当時の所属校の先生方、総合教育センターの皆様には感謝申し上げる。